

ある生徒のこと

雪がちらつくこの季節になると思い出す生徒達がいる。特に高校3年時に担任として関わった生徒達は強く心に残っている。人生の岐路となる進路目標と一緒に立ち向かったことが自分の人生と重なる。特に記憶に残っている一人の生徒について書いてみようと思う。

年末を迎え、いよいよ受験校を決めなければならない三者面談での話である。「絶対に受験したいんです。でも両親は無理だから受けさせないと言うんです。先生、何とか両親を説得して下さい。」涙ながら訴えてきた女子生徒がいた。理数系が得意で、大学では得意な数学を学びたいと高校入学時から難関大学を目指していた生徒である。所属する部活動でも手を抜かず、毎日遅くまで頑張っていた。しかし成績優秀ではあるが、目指す大学の合格は五分五分だった。だから不合格となった時、彼女には浪人は耐えられないだろうから合格圏にある大学へ出願して欲しいと考える親の思いも十分理解できるものだった。私は彼女を2年生から担任し、目指す大学への熱い思いを知っていた。目指すからには勉強も部活動も最後までやりきるよう話をしていた。そして、何よりも彼女のこれまでの努力を十分知っていたから、その大学への思いをあきらめさせたくなかった。生徒達には、挑戦すべき時に挑戦しなければ、将来その壁の前に怯んでしまった自分を一生悔いるかもしれないと言い続けてきたこともあり、必死の思いで両親の説得に当たった。一週間にもわたる話し合いの結果、何とか受験させてもらえることになった。彼女のこの挑戦は、必ず今後の人生で出会うであろう困難を乗り越える力になること。そしてその力は合否を超えたものであることを両親にわかってもらえたのだった。彼女の泣いて喜ぶ姿を今もはっきり覚えている。

その後の彼女の頑張りや、見ていてこちらが苦しくなるほどだった。そしてそこまでやるのなら合格できるだろう、合格させたいと願っていた。しかし、残念ながらその思いは届かず、あと数点というところで合格は果たせなかった。結局、彼女は両親が提示した「第一志望校は受けさせるけれど滑り止めの私大も受験すること」という条件をのみ、受験した大学に進学した。大学では得意な数学を生かして経済学を学び、アルバイトで塾講師として自らの経験を子供達に伝えた。卒業後は民間企業に就職して数年後結婚、現在は仕事も家庭も大切にしながら充実した毎日を送っている。

人生は多くの偶然に左右されながら進んでいく。たまたま旅行で訪れ

た場所が気に入り、一生住むことになったり、第二志望で入った会社で本当にやりたい仕事が見つかったりすることもある。彼女が志望校に合格していれば、また志望校を受験しなかったならば、別の人生があったかもしれない。しかし、ただ一つ言えることは、挑戦していなかったならば「あの時挑戦していたら自分の人生はきっと変わっていたはず」という思いがずっと心の奥底に潜み続け、人生の岐路にさしかかる度、疼くことになったのではないかということ。

「人間万事塞翁が馬」ということわざがあるが、人生では何が幸いとなり何が災いとなるかわからない。考えようによっては未来がわからないから頑張れるし、面白いとも言える。未来ある若者は、挑戦したいものがあれば躊躇せずにその突破に向け全力を尽くすべきだと思う。そして、突破出来ようが出来まいがその結果を受け入れ、全力を出し切ることができた自分に「自信」を持って一度きりの人生を切り拓いて欲しい。